

主の言葉を聞こうと

使徒言行録 13 : 44 - 52



司祭 ヨハネ 井田 泉

2022年5月15日

復活節第5主日

聖光教会にて

今日は復活節第5主日です。主イエスの復活を記念するイースターから4週間、およそ30日が過ぎました。復活日が過ぎて日が進んでいくと、だんだん主の復活の意識が薄れていくかもしれません。しかし使徒言行録によれば、主イエスは復活後40日にわたってたびたび弟子たちに現れてご自身が生きていることを示し、神の国について話されました（使徒言行録 1:3）。それですからわたしたちも、ただイースターが終わってしまったというのではなく、たびたび復活の主を思って過ごしたいと思います。

さらにわたしたちは、2000年前の弟子たちがそうであったように、ある時に向かって近づいています。何かと言うと、神の愛が炎のように燃えて弟子たちに注がれた日、聖霊降臨日に向かって近づいています。今日から3週間後、わたしたちは聖霊降臨日を迎えます。この聖霊降臨日（ペンテコステ）があつて教会が誕生しました。聖霊降臨日があつて福音の伝道が始まり、聖霊降臨があつたからこそ、わたしたちもイエス・キリストを知り、信じるようになったのです。

復活日と聖霊降臨日の間を生きるわたしたち。復活の主イエスを思いつつ聖霊降臨日を待ち望んで今の時を過ごしましょう。

ところで今日、最初に読まれた使徒言行録の最後に、「**聖霊**」という言葉が出て来たことに気づかれたでしょうか。

「他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。」

使徒言行録 13:52

弟子たちというのは、今、伝道旅行を続けているパウロとバルナバです。二人は「喜びと聖霊に満たされていた」。伝道することは喜びです。福音を伝えることは喜びです。主の言葉を分かち合うことは喜びです。なぜか。聖霊に満たされていたからです。

わたしたちはどうでしょうか。わたしたちもその喜びを経験する者でありたい。聖霊に生かされる者でありたいと願います。

今、喜びと聖霊に満たされている二人、パウロとバルナバですが、つい数日前、実はとてもひどい目に遭ったのです。今二人がいるのはイコニオンという町ですが、数日前までは、西のほう、ピシディアのアンティオキアという町に滞在していました。今の小アジア、トルコの西部です。ここはピシディア州の中心都市で、都市計画によって道路は碁盤の目に張り巡らされ、メインストリートには立派な水道（送水路 aqueduct）が敷かれており、12,000 人を収容する劇場があったそうです。またいくつもの大きな異教の神殿が建てられていました。

そのピシディアのアンティオキアでの話です。パウロとバルナバが伝えた福音を聞いて、喜んで受け容れる人たちがたくさんいました。その様子を今日の聖書日課の初めがこう伝えてい

ました。

「次の安息日になると、ほとんど町中の人々が主の言葉を聞く
うとして集まって来た。」使徒言行録 13:44

その1週間前の安息日（土曜日）、パウロとバルナバはそのユダヤ教の会堂礼拝に出席しました。会堂長が二人に好意を持ったようで、聖書の朗読の後、「何か会衆のための励ましのお言葉があれば、話してください」（13:15）と言ってきました。そこでパウロが立ち上がると、ざわめきが起こりました。パウロは手で人々を制して語りはじめました。

「イスラエルの人たち、ならびに神を畏れる方々、聞いてください。」使徒言行録 13:16

何を話したかと言うと、パウロはイスラエルの出エジプトから説き起こして、神の民の歴史を語り、神が救い主イエスを送ってくださったこと、エルサレムの人々やその指導者たちがイエスを死刑にしたこと、そして神がイエスを復活させられたことを語りました。特に繰り返し強調したのは、イエス・キリストの復活です。この復活された方イエスによって罪が赦され、救われるのだ、と。

これを聞いた人々の反応はどうだったかと言うと、「次の安息日にもこの話をしてほしい」というものでした。礼拝が終わってから、もっと話が聞きたいので、たくさんの人たちがつい

て来た、と書かれています (13:43)。

それから1週間たってさっきの話に続きます。

**「次の安息日になると、ほとんど町中の人々が主の言葉を聞く
うとして集まって来た。」 13:44**

多くの人々がこうして信仰に入りました。ところがある人々
はこれを妬み、口汚くののしって、パウロが話すことに反対し、
妨害しました。それでも二人は勇敢に語りました。しかし町の
有力者たちが扇動されて二人を迫害し、とうとう町から追放し
てしまいました。石を投げられたかもしれません。パウロたち
はどんなに失望したことでしょうか。どんなに腹が立ったこと
でしょうか。そうであるはずなのに、こう言われていました。

「弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。」 13:52

迫害され、追放されてもなお喜びがある。また力が湧いてく
る。これからまた新しく神さまのために働きたいと願う。次は
東のイコニオンに行って伝道しよう。それは、イエスさまの愛
が燃え続けているからです。聖霊が働いていてくださるからです。

そもそもこの伝道旅行の出発そのものが、聖霊の促しによる
ものでした。13章の初めのほうにこう記されています。

**「彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。『さあ、
バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたし**

が前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。』

13:2

人々が礼拝をしているときに、聖霊が語り、聖霊が命じた。聖霊とは、ただ命とか力というだけではなく、みずから働く主体、主役なのです。さらに続けてこう書いてあります。

「そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、…ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた。」 13:3

パウロ（サウロ）とバルナバはもちろんみずから祈り、みずから考え、決意したのです。しかしそのように決意させ、そのように実行させた、二人を歩み出させたのは、聖霊です。

「聖霊によって送り出されたバルナバとサウロ」

今日の使徒言行録の箇所から「聖霊」に注意を向けたのですが、もう一つここで注意を引く言葉があります。

「次の安息日になると、ほとんど町中の人が主の言葉を聞くうとして集まって来た。」

「主の言葉」です。

「異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。」

13:48

「こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。」 13:49

この短い箇所の中に、3回も「主の言葉」という言葉が繰り返

されています。

ピシディアのアンティオキアの人々は、主の言葉を聞こうとして集まり、主の言葉を喜んで賛美し、そして主の言葉はその地方全体に広まった。

パウロとバルナバが去った後も、ピシディアのアンティオキアの人々の中には主の言葉が生き続け、聖霊の火が燃え続けました。

いったい何が教会を力づけるのでしょうか。何がわたしたちを信仰的に力づけ、育むのでしょうか。それは聖霊と主の言葉です。これが薄れているのが今日の日本の教会の現実です。聖霊と主の言葉が、教会の中に、わたしたちひとりひとりの中に回復されることこそが、今とこれからに必要なことです。

ピシディアのアンティオキアに起こったことが、ささやかであっても、わたしたちの間に起こってほしい。主の言葉を聞こうとして集まり、主の言葉を喜び、そして主の言葉がわたしたちだけの範囲を超えて広がっていく。そのようなことが起こってほしい。

祈ります。

神さま、わたしたちに聖霊を注いでください。そして主の言葉を聞こうと願い求める者にしてください。人間の知識や教訓ではない、主の言葉こそがわたしたちの命です。聖霊がそのことを教え、はっきりと経験させてくださいますように。アーメン